(遞信省認可)

新流行詳細

掲載要目

懸賞文藝

子の生れた時

いらつめ

第七十二号

定價一冊二錢五厘

三坂きぬ嬢の

言文一致論

老武者(韻文)

處女虎の巻

いらつめ第七十二号目次（明治卅三年十月二十日）

日本音樂史稿（二）……………… 準鵬子

子の生れた時の親心（俳句文章）

新流行の冬物

男女羽織地、着物地、縞袢袖、帶地、半襟及び色合

處女虎の卷……………………… 万年新造

老武者（韻文）………………… 秋水樓

擱澤の君へ（言文一致論）……… 三坂きぬ

新書及び新誌

書學類纂、こども、小學毛筆畫帖

文章ふある各符号の略解

文章の主客

韻文の意味

腫物の痕

「ケヽレ」の論

痰を去る

和歌俳句の雜誌

小指の爪を長くする可否

化粧の書

計告及び社則　いらつめ一部中製金二錢五厘郵税共金三錢、十二部金二拾九錢郵税共金三拾五錢、二十四部金五拾七錢郵税共金六拾九錢、三十六部金八拾四錢郵税共金壹圓〇二錢ハ四十八部金壹圓郵税共金壹圓二拾四錢〇別製一部金三錢五厘郵税共金四錢、二十部金六拾五錢郵税共金七拾五錢、五十部金壹圓六拾五錢郵税共金壹圓九拾錢〇並別兩製共前金領收の上で無くてハ差上げぬ事〇府内に限り無郵税〇毎月二回（五日及二十日）發兌〇金子御差し送りの手續きハ郵便小爲替なれば拂渡郵便局とある處に　神田郵便局と記し受取人欄内に（神田平永町九番地成美社）と御記入の事〇郵券代用に郵便爲替の無い處に限り五厘切手で一割増しなれば妨げ無い事〇見本は五厘切手で並製五錢別製七錢領收の上差し上ます〇廣告料一行金八錢、割引無し

從第六十八號至第七十七號十部版權所有

明治卅三年十月十九日印刷　明治卅三年十月二十日出版

發行人　東京市神田區平永町九番地居住　山田武太郎

印刷人　東京市本郷區駒込西片町十番地居住　山本鑑之進

發行所　東京市神田區神田平永町九番地　成美社

○懸賞文藝新題

○第卅二回題（何でもよし）
右　新婚旅行の人に贈る……………十一月十日〆切

○第卅三回題（唱歌文章ㇵ限る）
右　小春日和……………十一月廿日〆切

○第卅四回題（何でもよし）
右　篤陰れ獼猴……………十二月十日〆切

○第卅五回題（何でもよし）
右　春衣裁縫……………十二月廿日〆切

○第卅六回題（何でもよし）
右　人に半襟を送る……………一月十日〆切

○第卅七回題（唱歌文章に限る）
右　無言の愛情……………一月廿日〆切

○第卅八回題（何でもよし）
右　嬉しいもの何でも三つ……………二月十日〆切

賞品も菊水摸樣の金又は銀杯

右賞品は一等賞の者、二等三度の者、三等六度れ者、四等十八度れ者及び是と同ト資格に相當する者に限り進呈します。〇賞ㇵ重なつて數ㇵ充ちた人は其賞と受ケカ題と詳細に志るして賞品を御請求なさい。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

日本音樂史稿（二）

準繩子

又た神樂ハ本朝第一の祭祀にして之を重ずると亦之より先あるハ無し。故に神樂の時ハ則ち地下の者といへども靈験を給ふの例あり。

里神樂　と名くる者ハ諸社に於て鼓及び銅拍子を撃て神子鳴鈴して舞ふを云ふなり。然れ共亦た地下舊記の中に於て八幡の神樂此名なり。傳へ曰ふ郷里の人執行に依て之を修す、号て里神樂といふ。蓋し修法の次第庭燎より早韓神を以て曲を終ふ。

安居神樂　ハ男山八幡に於てなり。安居とハ十二月朔日より十五日に至る迄と潔齋の人なり。此を名けて安居神樂の當人と云ふ。詳なると未だ知ず　所謂當人執行する故に安居神樂の名なり。此を修するの次第内侍所の如く略定の時庭燎より早韓神を出でし終て其駒を奏す。

高良神樂　山神樂　八幡高良神樂其の法安居神樂の如し。山神樂の名ハ石清水に限るの未だ舊典の中に見えず。蓋し山上に於て執行する故か。

夏神樂　ハ事今に其名有て其實を知らず。亦た舊典にも分明ならず。今相傳の説一二條を記し、以て闕を補ふ。

或説に曰く夏神樂にハ火を燒かずと。然れ共長和四年六月廿三日内侍所御神樂の時に於てハ左近の將曹重胤の請に依て兩面の庇中に於て庭を燒く云々。

又多資忠の記に曰く夏神樂に於てハ別に庭燎の歌なり内侍所四月神樂其法と用ゆ云々。

又一説にハ夏神樂の法河瀬に於て榊を建て柱と爲し、竹を以て棚と爲して以て神供を置くの處と爲す。河社と謂ふなり云々。

倂案抄に曰く神樂家傳の人に之を尋ぬるに夏神樂なる由。然れ共譜に見えずと云ふ云々。此他に人長神樂陪從樂神恆例神樂殿上神樂等あれ共皆大同小異なるを以て此處に例記せず。

内侍所　禁秘抄に曰く白河院仰せ曰く、昔内侍所の神鏡飛び出で天に上らんと欲す。時に内侍唐衣の袖を懸け引き留め奉る。此れ因縁に依て女官守護し奉り、かつ内侍所と云ふ云々。

催馬樂

催馬樂ハ種々の説あり。然れ共何れも信じ難し。先ッ一二を擧れバ梁塵愚案抄にハ昔諸國より御貢物を大藏省へ納し時民の口吟に謡ひける歌なれバサイバラと名くるなり馬を催すと書るハ御貢物出來する馬をかり催す心なりと有り。催馬樂註秘抄も之に大仝少異なり。賀茂眞淵の催馬樂考にハ　上略　これをバ唐の世に催花樂てふ樂のなりしを以て好事のもの、後に催馬樂とい云ひつらん。三代實録にもしかしるせり。　中略　催馬樂と書くも猶サイバリと云ふべく覺

之云々。
又一說には催馬樂は躰源抄に云ふ如く朝葛新の猶作と云へり。　又た續敎訓抄に云ふ催馬樂とは催馬樂と云ふ樂なり其より事起れり。　此樂の唱歌に駒を催すと云ふとありけるを聽て歌と成て國々より歌に出したり。　我駒と云ふ催馬樂是なり故に馬を催すとつけたるなり。　古註には昔貢調は歌といへるは誤なるべし云々と有るを嬉遊笑覽に駁して曰く、此說心得難し先づ催馬樂と云ふ樂ありとは異國の樂名とするに似たり其章に駒を催すとあるを歌となして我駒のみ一曲ならば國々より歌ひ出しけりとは如何。　其は本の催馬樂は早く亡びたりと云ふ心にや、いと覺束なし。　もと此歌萬葉十二に乞吾駒早去欲云々とある歌なり。　初二句馬を催す詞あると以て催馬樂とは名けたり。　此樂のこと先輩種々に論じたれ共定かならぬを云々と言へり。

又　風俗歌舞源流考を見るに鹿兒島名勝考薩摩の白尾國柱著を引て曰く都城の地名の原註に知惠光院記作操々擧云々 一名鼓川一名齋小路其の西を催馬樂村と云ふ。　昔催馬樂を謠ふもれ〻居りし所なり云々とあれば我國の古代口遊の如き者か。　又春臺先生は催馬樂は日本風俗歌の最古なる物と云はれたり。

大日本史には三代實錄を引て曰く催馬樂は其の起る所詳にせず。　尙侍廣井女王貞觀元年十月二十三日紀內侍從三位廣井女王薨す長親王の後長田王の曾孫なりと云ふ 特に是の曲に善し。　後始て世に傳ふ云々と有國史に見ゆ。

りけり。　而して催馬樂は凡て六十一曲ありて呂律に別てり。　左の如し而して其譜は延喜廿年藤原忠房朝臣に勅して定めたまひけりと見えたり。　又之れに藤家の傳と源家の傳との二様ありて少く異同ありと云ふ。

呂歌三十六曲目錄

穴貴	新年	梅枝
華垣	櫻人	葛城
河ノ口	竹河	山城
紀伊國	石川	此殿
此殿西	此殿奧	鷹山
妹子我	美濃山	總角
田中	酒飲	眉刀自女 一作御馬草
難波海	我家	無力蝦
鈴鹿河	奧山	奧山爾

律歌二十五曲目錄

我駒	澤田川	高砂
夏引	貫河	東屋
青柳	伊勢海	庭生
走非	飛鳥川	我門
我門乎	大路	大芹
淺水	刺櫛	鷹子
道口	更衣	何爲
鷄鳴	老鼠	陰名

西宮記に依るに律歌には必ず平調を用ゐ、呂歌には必ず双調を用ゐるとありといふ。

第二十九回懸賞文藝應募得點

題　子の生れし時は親心

○俳句

生れ兒を抱いて知るや親の恩……後樂散士（ナカノ）

ひあづるの聲にもまさる初音かな……撫箏女史（ミノ）

初産に知るや我身の親は恩……竹内德三郎（マシン）

待わびし月も今宵の詠めかな……田木綿吉（マシン）

祝てるゝ先に笑顔をこぼしけり……紅山（ミヘ）

以上五句無賞

血を分くるつらさうれしさ一時あり……奥野やす（サカヒ）

安産を田植の中へ志らせけり……竹内德三郎（マシン）

以上二句第四等賞

○和歌

うまし子を得たりとおもふ悦に
貴きいやしきふたつやはある……ひさゑ（イヘキ）

生ひ初し松の緑子行末は
動かぬ國の柱ともしれ……仝上

身ふたつにあれど心は一すぢに
末あやゝれと子をおもふかな……奥野やす（サカヒ）

あすよりは物を思ふは種ぞとも
さとらでめづる親ごゝろかな……撫箏女史（ミノ）

わがつまの俤うつすみどり子の
かほゑめるけふぞうれしかりける……仝上

たらちねのおやのめぐみのいとふかき
こゝろをいまぞくみそめにける……仝上

望みある世とも成りけりみどり子の
生れいでたる親のこゝろに……露城散人（イセ）

以上七首無賞

種蒔しより日毎にまちしかひありて
けふも見えそむるそれゝの苗……撫箏女史（ミノ）

潮見行く我身もしらで朝顔の
つぼみをいそぐ親こゝろかな……山園居士（フクシマ）

たぐひなき寶を得たり子をえたり
玉もこがねも今はなにせん……横山ひろ（ヒタカ）

撫子は生ひ出にけりいつしかと
花さく時を今よりぞまつ……仝上

いや高き親のめぐみを知るといふ
うれしき時に我も逢ひけり……蘆野潤三郎（イヘシロ）

以上五首第四等賞

ひな鶴のあく一こゑにけふよりは
雲井のみこそ阿ふがれにけれ……永嶋芳子（サブキ）

萬代のよそひもかあと竹の子は
千ひろの末を今よりぞまつ……仝上

生ひたちはおもひやられてなでし子は
千代の初聲きくもうれしき……………美見仲子（ナカヤマ）
今よりは我れを親とも呼子鳥
なく聲きくも嬉しかりけり……………本吉ゑは（カロウ）
思ひきや我立居さへ我ならぬ
こゝろと親のこゝろなりとは…………雪の國主人（サナリ）
うれしさにつけても思ふそのむかし
なき父母もかくやましけん…………仝上
以上六首第三等賞

○文章

（イ）　藤元わさ（ナオヒ）

「あゝ氏神様のお蔭だ。阿彌陀如來のお慈悲だ。これ阿三ー　ちやと走ッてお寺へ參詣して呉れ。長吉やお前はお社へ……早くお禮に……れい〳〵そして序に彼の母屋のお婆さんにも。まだ〳〵南の……い……隱居さんにも……さア早く〳〵。愚圖ついては不可んよ。れい走ッて行のんか。」

「遠神えみため々々々々々々」産室より漏るゝ聲。

「南無阿彌陀佛々々々々々々」佛間に聞ゆる聲。

喜悦と云ふは四五日經ても子を生んだ其時の親の心ー　其當時は只狼狽といふより外へありません。

（ロ）　伊勢大夫（イセ）

あゝどうしたらよからうー　旦那は男の子々〳〵〳〵々々って言ッてゐられたのに。男の子を生んだら……ッて様々に未來を想つて居られたのに。お里どうぞ男の子を生んで呉れ。どうぢや男の子らしいかッて仰有ッたときには妾も笑ッてはい生ますとも乾度男の子を生ますにッてお應をしたが、お氣ふと心の中にもし女の子だッたらどうなさるだらう。でも遠くしないかしらんッて思ッたとき　れ、もう思ふまい〳〵そんなことは夢にもない筈ぢや。乾度男の子に違ひないと思ひかへしては毎日〳〵他のきいたらをかしがるだらうよ。二人して男の子〳〵〳〵々々ッてけふこの日に無量の希望を集めて居たのに。一昨日島渡巳むをえぬ用があるからッて出られるときにも男の子々々〳〵〳〵ッて言はれるので妾も御心配なさいますな、乾度男の子ですよッて言ふと、ぢやと嬉しいお面ッてをかしげな笑ひをして見送り、見返りして訣れたのに。あゝこの子と見なしたら……。明日はもうお歸りになりましやうが、嘸お力をお落しなさることでしやう。これを思ふと……。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

どう、え？　旦那がお歸りなすッて？　あゝどうしやッて言ふところへ夫は機嫌よく入ッてきて、お里どうぢやッたッて言ふや、お里ではやと決心して、抱いてゐた赤子と夫の前にさしつけたまゝ泣き沈んだ。

（ハ）　櫻乃（イヘレ）

おや乳房を口にして眠ッたの？　どれ口の中の乳汁を拭き取つてやらう！　すや／＼と逦りし此の愛らしき寐顔。　お手紙には唯一通りよろこんで下さッたばかり！　だがお心の中ではどんなによろこびなさッたか。　此の暮までにはお皈りとの御手紙。　九、十、十一、十二。三四の十二、今から百二十日許り、まアそんなに愛らしくなるだらう。　百日余りもたてば笑ふやうになるし……坊を養育して教ゆるが私の第一の役目。脊負ふのは害になるから。　母の乳汁をすてゝ牛乳を與ふる道理もないから。寒い時も……暑い時も……母の務で見たこと、阿母さんに聞いた事なぞを……。　幼稚園にやるのもよしあし。家庭でよくやつて、折り／＼よその子供達と遊ばしたなら、內氣になる氣づかひもあるまいから……小學校へ通ふやうになッたなら辨當も坊にもたせて、雨の日も雪の日もあるりせ……卒業すると中學校へ……學資にあてる爲めに貯金局へあづけたのも、結婚の翌日からもう百圓近く、一ケ月五六圓、おづとそれは空想、坊一人許りぢやないもれ、一ケ月三圓づゝとしても一年に三十六圓、十五六年には五百餘圓、今迄のと利子の利子と合すれば六七百にはなるうち、坊の學資にと……。　早
おや　醒めたのかへ。　そんなに丸い眼をしないでよ。
くね大き、なつて阿父さんにお目にかゝるのね。　坊！

（一）

捫■居士（シフマミ）

「お〻お皈りですの。　お早うござりました。」

「どうも赤兒の顏が……」

「おや／＼お子好でゐらつしやいますこと。　は、、、れゝ是は／＼大きな鯉魚……」

「彼處の醫者に聞いたら乳汁の少ないのには鯉に限るとのことで……おッ春やお前そこへ行ッてるの―赤兒もかまはないで…困るねエ。」

「手水に行ッたんですよ。」

「又それそんなもれを……實によゴッちまッつたなア。」

「これもわるくて……」

「お〻さ。　子を生んだ時も食物に氣を付けるが一番大切だと前にも言ッたぢやないか。　あ…あの鯉を―肉を食ッて鱗を乳へ粘り付けるのだよ。　これ德や能く拵へておくれ。」

「はい。」

「そしてあなた先刻彼の米屋が參りましたが、御月給を？」

「受取ッて來た。　その革袋にある。」

「おや足りませんよ。　こりや何うしたんです？」

「貯金局に預けて來たのよ。　此子の後來の學資と思つて……」

「旦那樣お手まはしのはやいこと……おや、、」

「おや、、」

（＊）

小富士（イロ）

「姉子さん出來ましたの？」

「いゝえまだ出來ませんの。だつて六かしいわ。まだ經驗がないから。はゝ、あなたお出來なさつたの？」

「いゝえ妾もまだなの。作りかけて見ても明日の課程が氣になつてちッとも出來ないからよしましたわ。」

「ほんとにね明日の下讀もしないで。だれから頼まれたんだらう。だがね樣さんどんなでしやうね、子の出來た時は？」

「どんなッて今おッしやる通りまだ經驗しないから分りませんけれど……まアよく考へておらんなさいな。懐妊してからけふまでの辛勞苦勞。文王のお母さん見たやうに目に邪色を見ず、耳に淫聲を聞かずと起居に動作に注意して無事に出産するやうと朝夕祈つてゐた曉ですもの、やすやすと玉のやうな子でも生れてごらんなさい其喜び其嬉しさ　とても妾等の想像の及ぶ處ではありますまい。是までの辛勞苦勞もどッかへ行ッてしまふでしやう。」

「さうでしやうね。よく人のいふ重荷をおろしたやうでしやうね。」

「あゝさうですとも。だがまだ一つ大した重荷がありますわ教育といふ。」

「左様ですね、今度のはなかなか重荷ですね。家庭の教育がよくないと學校でいくら能く教導してもらッてもだめだといふ事は人さんのよくおッしやる事、生落したどッかりが母親のつと先ではないどゝね。此間の講義の時もおッしやッてね。」

「ほゝさうでしたね。家庭のをしへはどうしても母親がしなければ……それや談話が他へ外れて仕舞いました。」

以上五章無賞

（～）

竹下山人

子の生れた時の親の感じ、はてなこんなに骨を折ッたことはないがこれたかりハ經驗といふやつがなけりやア致し方が無いかな。併し僕を！て小説家たらしめたら、今夜ハ眠られまい……まいぢやあない筈がない。ても大丈夫これしきのことに頭腦を腐らするかと思へバ實に不本意、不本意、不本意の極だなア。

問つ答へつ胸の中、燈下に獨り手を拱ました。むゝ膝をとも縁合、彼の婆さんに……さうよ。我ながらぬかッて居ッた。

強く障子に手とかけますと雨戸の外。

「はい郵便……」

郵便……これほど忙がしいのに節知らずめ。後で讀むわ。とていふものゝ一体誰ぢやおや……父上！　何んだらう。それぢや棄てゝおかれぬわい。手に取り上げて封切れバ、拜啓陳者娘事昨日午后八時頃男兒出産いたし候。初産に

してば誠に心易く有之、且つ産後母子共壯健に候間御安神可然候。　先ハ取り急ぎ御報迄匆々。

何、妻が出産した……それよ九月だものゝ氣つかなんだ。男見ハ何よりだ。　親のものハ子のもれ僕も骨折りがひが出來た。　まて早く顔が見たい。　明日歸郷しやうか。　いやいや一ヶ月も過ぎてにしやうの。　其時分は笑ふかしらん。　いや來春にしやうの、はふかもしれん。　まッたそれより名が大切ぢや。　長男だから一太郎の、併し郎ハ省きたい。一太……あれも可笑しい。

暫時無言、柱時計ハ九時と告げました。　名前あんぞどうでも、先ッきの大切の用事を忘れた。　何であッたかしらん……それそれ隣りの婆さん所へ行くのだ。　手紙に……ではなく子まひかさるゝは……子に……はてな子の生れた時分の親のうやむやて矢張りかやうなものかしらん！

（ト）　秋江（トケイ）

評　修辭が些劣りましさ。

磨き立てた黑ぬりの車を走らせて今玄關口、

「お歸りイ」

車夫の呼び聲に續いて下りるのハ此家の主人公です。　如何したのか夫人を初め腰もと一人出むかへる者のない不思議さ。　車夫も主人もやゝ拍子拔けがしました。　中まも主人ハ氣の早い質、少し顔の色が變ッて、手わらく靴をぬき捨てゝ、中の口までばいりました。　奥の方からあわたゞしくかけてきた十六七の小間使が出會がしらに兩手をついて、

「おかへり遊ばしませ。　あの只今奥樣がおのなんで……若樣で御座いました」

「む、さうか？」

俄に顔の色が直りました。　今朝出勤する時には未だ此の家族の内にかぞへる事が出來なかッたものを……胸ハ妙にとッて夫人の居間れ襖をあける手もふるへて……見れば夫人の傍にハ天鵞絨の様な黑い髮の毛で、そして桃色のかわいらしい顔が……口ハ思ふ樣にハそたらかず、出る音聲もあとさき。

「男か……丈夫のい？」

（ナ）　後樂散士（ナガ）

「良人御覽あそばせ、坊が燕の飛ぶのと一心に見て居りますが何んな心持がして居りましやう？」

「何んな心持ッてまだ一年にもならないもの、黑いものがでたりはいッたりしてゐるのが見える位のもんだらうよ。」

子を抱く妻を相手に椽の雛つばめに親鳥が餌を運ぶのを見て睦まじく語ふ夫婦、まづ此頃までも知らなんだ浮世の一苦勞、子をもッて喜ぶものゝ兆心配も一層。思へば自分等が幼なかりし時兩親の苦心は如何なりしぞと考へれば……嗚呼考へれば倚身にしみ〲たる親の恩。

子にやせる燕見て知れ親の恩

「あれ御覧此頃まではむく〱と太ッてゐた燕も餌を運ぶのお忙がしいと見えてあのやせたこと。」

「さうでございますとも禽獸でも子程かわいゝものはございませんから自分がたべるものもをしまず子にやらうと致しましてあれあの通り絶え間なく前後となしに飛び歩ッて餌を運んで居りますの……」

互に見あはす顔同時に視線ハ幼子の愛らしき面に注ぐ折りしもわッと泣きだした聲にびッくり立ち揚がれば、吾子ではなく往來を見守の脊に目を覺まし、乳ほしきにや泣き出せし同じ年頃の子。

「あれやびッくりした。坊が泣きだしたかと思ひましたよ……それでもかわいさうではございませんか。彼の樣に泣いて居りますのよねー良人……」

評　結末他の子を憐れむ處は同感の心を寫した好着目です。

（り）

橘さち子(廿七)

「御新造樣御心持ハ如何で御座います。今朝ハつひうとく〱寐ましたから何の御用もござり遊ばしハしませんでしたの。」

「れゝばアや。お前昨夜寐なかッたからさぞくたびれたらう。私ハ氣分もよし、此間中とハ樂になッたからもうそこらへ出ゝい樣だよ。」

「まア何より結構で……しかし初めてハ猶さらお後がお大事で……赤さまは?」

「私の中よねかせてあるよ。今お母樣ハ御用であちらへいらッしやッたから。今もねお母樣とよく見たが手足の指もよく揃ッてゐるよ。ほゝゝ。」

「そんなことばかりおッしやッて昨夜わたくしと産婆さんとでよくあらためましたもの。」

「さう? さうだけれど生れるまでハどんなにか心配したよ。ほゝゝ。」

「そりやさうで御座いましやうけれど、そんなつまらない御心配ハなさらぬ方がよろしいので御座います。さア赤兒さまはアの處へ入らッしやい。」

と乳母ハ我膝の上に抱き取りつく〲ながめて、

「御覧遊ばせお鼻の高い處ハ若旦那樣にいきうつし、お口元のお可愛らしい處と、生へぎはの處、お髮の濃い處ハあなたにそッくり。昨夜もお産がすみますと大旦那樣がおよろこび遊ばして嬰やふれハ又命がのびると仰せられて、外國へも電信をおかけ遊ばしました。外國でも若旦那樣のおよろこび遊ばすおりがお見えるやうで御座います。」

「それで男だとよいけれど……」

「まアあなたお初めてゝ御座いますから何樣でもよう御

座います。」

「それでも里のお父様が弟の生れた時におよろこび遊ばして今乳を尋ねてなくても成人してから白馬騎の人を指揮せる聲になると星巖先生の詩にもあると云ッて大層およろこびあすッたもの。」

「そんなむづかしい事はいりませんよ。ねエお孃さま。早く御成人なさいませ。又婆が御供して幼稚園へ參りましやう。」

「さうなッたらうれしいだらうねエ……」

「えゝ直で御座います。あなたが初めて幼稚園へ入らしッた時私が一寸見えぬとておあたがおむづかッたもきのふけふのやうでしたがそれがもうこんな赤様……ほんとに嬉しい。」

「風車まはれ〳〵風車。」

「おは、、婆や」

「おは、、」

評　愛嬌充分

以上三章第三等賞

子（ヌ）　氷野秀（十七）

子ある女は去るとは妾に云はれしこともある。月見ぬ闇の悲しさも何んと詮すべ泣くばかり、系圖を絶すは不孝なり、不孝は誰より始まるかと、それとはなしに責めらるゝ子なきの罪も無理あらねば通る道なき絶体絶命。離れに問ひ談合をすればとて極まることを如何にせん。貧乏子ありとは誇るべく富貴子なきい女の恥辱！　此の心遣ひも泡と消えて夢と過ぎにし今日の嬉しさ。それを祝ひて來る誰彼に樂しいお子だ、殊に男の子、まア御手柄のこと。お父さんに似て敏捷でしやうと全て言葉に賞めらるゝを聞く心は云ふに云はれぬ嬉しさを子の生るゝ苦の種とは何故云ふにか知らん？　可愛い赤子と抱き〳〵看護折も折り温和の顔に笑を含みて、

「あまりよく寐るではないか。」

と入り來りて、

「目が醒めたか。どれ一遍抱いてやらう。それゝ啼くなよ〳〵。」

「貴郎よく立つ聲ですねエ。」

「ふウんよく立つ聲が直えエ、ぴイ、ぴイと變るよ。」

「貴郎五年も六年もさきのことをおや、、。」

「でもお父さんの子だもの受合ッてえエ、ぴイ、ぴイとやるねエ。」

「貴郎何にしたらよいでしやう？」

「何でも好む事を遣らせる積りさ。この……眉間の廣いは度胸の宏濶と示し、口元の締まッたのは謹愼の相だから何でも人物だよ。」

「おや、、貴郎人相見ですねエ……」

「まア一盃飲ましてやれ。　るに笑ッてるふウんをかしい

か……あゝ可愛い子ぶ。」

評　結末は老手です。

右第二等賞

(ル)

芦園　居士(ロワイン)

「こりや困りました。　餘程の難産です。　子を殺すか親を殺すかといふ場合に立ちいたりました。」

「え……えッ……左……左様でござりますか……」

後て無言。俄かに顔色が變りました。

「源治郎や(うるみ聲)

「はい」(おなじく)

「お前どうするの……でも親に子は代へられまいぞ。　能く考へてごらん。　お醫者樣え。　若し子さへ……子さへ……おられバ親にて……何にも……氣遣て……助かりましやうか。」

「左樣ですね、どうも確く保証ハ出來ませんが多分助かるたらう!」

時しも產婦ハせつなき聲で聞くより早く老母ハ胸をとろき

「お菊や〳〵ど……ど……どうしたの……」

いそがはしく後に廻り、抱き起しました……が、どんな喜びが出來ました。

「御醫者樣赤兒ハ早生れました。」

「して死んでるい。」

「い〻え、しかも……あれ。」

今までひッそりとした座敷も俄かに賑かにありました。　以前より腕くみあはせ如何ハせんと案じゐたる亭主も其喜びや如何あらん。

「皆樣おやさに御心配かけました。　病人も大都よくあッてねむりましたからどうぞ御歸り下さりませ……お母さんもう大丈夫です休みましやう。」

(ヲ)

飛綿　子(ナイト)

「母ちゃん赤坊と僕とどッちが愛兒?　え、母ちゃん。」

馳せ來りて母の肩先よそがり、一念に問ふいぢらしさ。

折しも奥より追ひ來る小間使。

「坊ちゃんいきませんよ。　さア入らッしやい。　やッと寐ねしてゐらつしやる嬢ちゃんがおむづかり遊バすよ。」

「いやだ赤坊泣かしてやるんだ。」

「ほらまア……お可愛い〻嬢ちゃんをいたづらなすッちやいけませんよ。」

「ねエ母ちゃん僕が愛兒だねエ。　さく!　いやだ、いけさく!」

添乳をして余念なき母親は莞爾として微笑をふくみ、小間使と見やりましる。

「何を思ひついたんだらうねエ。　それさうだよ。　そんないたづらしちや愛兒ぢやないね。　さく!」

「はヽさうでございますよ。」

「しおいと貝見？」

「れまへ陥ちやんハ是から兄さんだァね。 そんなにむでくしおいであれから赤坊と可愛がッてやらなくッちやいゝない。 行状よくして赤坊のやうよおとなしくそると貝見だ。」

「奥さま。 あんだとんおよりお嬉しうございましやうね、お嬢さまで……」

「あゝさうよ。 あの兒が男だから……旦那様ヽ厭で居らッしやるけれど一人ハ女の子も……」

「さうでございますとも。 ねェ坊ちやんお可愛い嬢ちやんですね。」

折しも玄関の方よて

「お歸へりィ。」

「おや旦那さまお歸り。 坊ちやん入らッしやい。 お父様お歸りですよ、 早く。」

評　作ハ甚だよく出來て居ますが、 親心が充分で無い故あの部に入れるあとにありました。

以上二章審査以外

新流行の冬物

この冬よ行はれる流行衣類及び附屬品は概して前年と大きお相違も有りませんが、 猶多少ヽ体面の改まつた處も有ります。 今男物（和服）から順々に女物に移つて其細かい處と擧げて見ましやう。 かへりみれバ本紙廣告欄にも猶る通りこの老舗白木屋もやがて冬物の賣出しよ取り掛り、 其他の諸店も冬物の客を待つところ諸嬢があゝに參考されてはくらか便もありましやう。

●男物の部

羽織

ヽ矢張り紋付きで、 需用の最多數を占めるのは相變らず魚子です。 一樂織りヽ第二よ位し、 羽二重も次点者の位付けです。 但し需用者ヽ唯前のよ比べて少ないだけ、 まづハ中々多い方です。

色合は黒が八分の流行、 色物が二分の流行で、 黒でハ西京の紙椰子染ゲ最も買ひ手の意を滿たすやうです。 色物ハ藍鐵及び藍鼠のたぐひです。

紋ヽ三所紋が七分の流行、 一所紋が三分の流行で、 言ふまでも無い事、 五所紋ハ最早大野暮の骨頂と爲つてかへりみる者も有りません。

縞柄ものヽ羽織でハ一樂織、 及び上等糸織が最上位、 また

紮糸織、結城紬の類も相變はらず多數で需用者が有ります。ことに結城では近來織元が非常に勉強して織り出すたの價格もやそく、のみか柄合ひに至つても珍らしい形とさま〴〵拵らへ出すことそれが得意と多く占めた原因です。

着物

品柄は羽織地と大した相違も有りません。　もつとも下着地は吉野織、八端織、本琉球紬、これらは餘りに變りは無くその流行の勢力も大抵は五分々々です。

襦袢の袖

これは第一の流行が濱ちりめんの大幅物です。　色合ひも藍鐵、藍鼠の類で、その他の變り色はあまり流行しません。

帶

男帶といへば博多と相場が付いたやうなもの、ことしも矢張り博多です。　片側が鐵無地に片側が微塵形、または紋織の類、これがおしなべての流行です。　が、其他に一種の新流行が出來ました。　婦人の帶地に用ゐた繻珍織を男帶に用ゐ出したことで、また別に吉野織の帶をとしえる人も有ります。　意氣宇宙を呑むと許せさうな新工夫です。

●女物の部

羽織

羽織地にはやはり第一等が縮緬で小紋、色物が四分、黒が六分の流行です。　小紋もこの春からかゝてさしたる衰退と招きもしません。が、やゝ少なく爲つた方でしやうか。　最も流行する色合ひは藍鼠のかへしで、藍鐵はやゝ武張り過ぎる色とて婦人方にはあまり適しません。　淡柿色はやはり行それて居て、あれは非常に目に立つため兎角わるい貴婦人の愛顧が厚いことです。　それと同じく人の目について、そのためいらつめの好みに適ふのは善哉茶で、以上いづれも小紋に取り用ゐる色合ひです。

無地物の羽織の色合ひでは藍鼠、利久鼠がその第一のところです。　三所紋六分の流行に、一所紋四分の流行です。もとより紋は小さい方です。

着物

着物地は紋附きの三枚がさねで、鼠色にフキ模樣が第一の流行です。　その他には花色うらで鼠かへしの小紋物です。前の方も高尙優美きはまるもの。後の方も粹、やさ形、且意氣あるものです。

縞柄物ではやはり例の京御召ちりめんが第一です。　縞柄も細かい縦縞に、それで無ければ微塵くづしの類です。　色合に至つては藍鐵、利久、善哉茶が流行で、あまり赤がゝつた縞物は流行りません。

小袖のうち一樂おりもやゝ需用者が起りました。

帶地

あれは相變らず繻珍です。　色合ひは善哉茶、利久鼠、柳

鼠の類、それで無ければ黒地の伴模様です。概して言へば模様ものが多く人に愛玩されます。ことにこゝで

令嬢がたの

嗜好に適し、またよく似合ふものが有ります。即ち、白茶地の中模様で、その品のよさ口には言へぬ程です。その他には

小柳繻子の飛模様

それにも需用者が次第々々に殖えて來ました。小柳の流行の色の恢復しはじめた趣きは一昨年末のいらつめに吾々が揭げました。さいはひに其豫言も外れず、今年に至つて充分流行と爲り立ちました。

其他片側物に至つては前の丸ものと同じ姿、別段に變りは有りません。

半襟

かつてことしの春のいらつめに一樂織の半襟がいちゞめ方の間にやゝ行はれ出したと言ひました。ことしの冬に至つて其需用者がやゝ増しましたが、さすがにまた多數には立ち至れません。今のところでは縮緬が八分の流行で、一樂が二分の流行です。

色合ひは紅かけ、紫藤色、胡桃色、鴨羽色、淡柿、利休鼠などのところが飛ぶやうにして賣れて行きます。しかも、これらは令嬢がたの見離すに忍びぬ色合ひ、それ故に向くところもまた令嬢がたです。もつとも貴婦人向きには一歩くすんで藍鼠が多く出ます。が、も一つ聞き落としがたい物が有り、即ち此頃の新織り出しもの、

京御めしの半襟

と一寸目先がかはつて珍らしく、かつ巧みに出來て居るため大に人氣を得て來ました。

繻絆の袖

これはやはり鼠地へ飛びもやうの有るもので、あまり變りも無く、いつも大抵同じやうなものです。

以上が本年の冬の流行で、決してこの外に走るまいと大抵も斷言出來ます。さて右のところを概して見れば、色物に至つては隨分艶美きはまるものが流行りますが、不思議はそれと反比例で縞柄又は模様に至つては概ね質素な方が八九分の勢力を持つて居ます。美術においてもある「物の調和」その理から言へば、さして今日の流行も大難と下すべき物ではありません。これでも六七年以前の無味雑駁こつてり盡くしの流行に比べれば意匠の進歩も歴々として目にもつきます。それ故に吾々はことしの此流行について批難の点を入れません。序ながら以上各種の品の揃つて居る處は日本橋の白木屋と越後屋とです。

處女虎の巻

貴女家内心携といふ西洋の雜誌に見出しのやうな說が出て居ました。一寸珍らしいまゝ意味を譯せば左の通りです。

說は萬年新造の筆に成つたとの事です。

處女虎の巻の心得の第一とは自分が男に是非たよらなければ生活が出來ぬなどゝゆめ〳〵男に思はれぬやうにする事。

男はすぐに付け込むものゆゑ、ゆめ〳〵何でも男の自由に爲ると男に思はせぬやうする事。

自分の母に許されたにしろ、男と二人双々手をたづさへて外出するのは強ひて望まぬ体を男に見せる事。

同じく男と一所に踏舞するのをあまり好まぬやうに見せつける事。

こちらのために男に錢をつかはせぬ事。男は何か氣に入られやうと品物其他を買つてくれるものゝ、それに對してもあまり喜び過ぎぬが肝要。何より角より禮儀のある交際を望むやうに見せつける事。

男は女の姓を呼ぶのがきらひで、まて名を呼ぶのが好き、此秘事を知つてあまり打ち解け過ぎぬやうする事。

ゆめ〳〵猥りに男に首を抱かせ、又は接吻などさせぬやう考へる事。うつかり男をして此方の指に指環を嵌めさせたら往生、すぐに接吻は爲れるもの。此方も承知なら許すがよしたゞし無暗に接吻も許せば自然に其價値が下るとの注意を忘らぬやうする事云々」

さも經驗のありさうないましめ、但し日本の淑女は之に對してそんな感じを御持ちでしやう。身を高くする段に於ては吾々はむしろ此種類の意氣込みを望みます。

老武者（オールド、アイアンサイヅ）

秋水樓主

あゝ彼の旗つひにやぶらる！　いくとせぞ高く舞ひしを？
幾人ぞ、こおどりせしは？——飜へるかの旗を見て。
ときの聲そのもとに湧き、　砲のおとあめつちを裂く。
海にすむ靈鳥死なば、　いかで雲吹きはらふべき。

もの〻ふの血を呑みし船、　敵兵のひざかゞめしは
いきどほる風濤をふみ　恐怖にていろ變へし時！
勝つ味方、くづる敵兵　いかめしさもはや得知らじ、
哀なり海上の鷲、　魔に逢ひていまはす斷々。

くがの上になど裂かるべき。　むしろ海、海に沈まん——
千尋の底とさわがして、　こゝぞげに永眠の塚！
檣に國旗ひるがへし　やぶれたる帆ももとのまゝ
龍神の餌となるまで、　狂ふかぜ！　光るいな妻

撰澤の君へ

三坂きぬ寄

いらつめ六十九号で日本文章に關する御論を拜讀いたしました、結構あ御作殊に言文一致を日本文れ主義としたいとれ御意見御目もトいせぬ乍ら何と無う亦暮はしいやうな心地もいたしまそあハれ全志のもの折角の御示敎をして下さいませ

扱御文中「文章れ一定しあいのそ文學の一定しないのであるといふても差支ない位」との御言葉妾等風情ハ此御言葉よ對して明瞭な觀念を得能ひません　が詮ずる處我日本文章れ洗涙お數多い處から文學の進步よ莫大な障礙を興へてゐるとれ御心でしやう　數にも足らぬ女性の身乍らも此文學にハ平生耳を聳てる性癖わる妾　それ丈に亦心のゝ御全樣ノ考を持ッてゐます　實に小河細溝―現時れ文章が一條の波漫々な茫洗よ歸し去るれハ果して何時のことやら　妾等ハ空しく之を茫漢世界れ遠山と待つてゐるのハ自ら搖らぬとの議を享けも致しましやうが口惜しいやうな感情を常住持ッてゐます次第あのでそ　云ふ迄もなく文學ハ愛國の志想を養成する上にも一个人の快樂と與へる上にも必要あもの　此の必要な文學を表彰發揚する文章と採擇するに當ッてれ　必要は早言文一致で無くてならぬと―もし心あらバ云ふてゐやうと迄妾等ハ思ッてゐます　それですが此樣あことを云ふたものが有りました「言文一致ハ下火にあッた」―固より何處れ人やら名も理も分らぬもれゝ言葉で採るにハ足らぬもれヽ　是誠よ事實を踰ひるものゝ言文一致れ區域ゝ日と共に月と并んで廣大にあッて行れます　しかし幾ら區域か廣大になるとはいへ效益れ無いものならた　固より厭ふへきの現象　が果して厭ふべき現象でしやうか　實地會得し易い又學び易いなどれ輕い点のら見ても目を眠るまでもあいこと　其愈々益々行ハるゝ理由も多言を要しませんです　で　妾等ゝ此矢先尙も之を普通とする手段として竊かに思ふ處も無くハ有りませんでした　其折　自然御計書にも注目して通讀も一回よは止まらぬ終に字句の上よも疑惑が起りました

先づ今日の言文一致を總括して「夫れハ〳〵二三名家を除く外ハ見るよ見られあい」と御下しになッて御貶黜で　如何よも理想的標準の上から御覽の眼よゝ左樣にも見えるでしやうましかし其總てに圓滿具足を留むのハ實無理あ事てハ御座いますか　敎理を究めた上の發心で無いものも宗敎家こ之を一人れ仰信者として許す計りか大に喜ぶとやら妾等ハ其與に共にする友を可成多く得て提携の間よも益を得たいと思ッてゐるのです　且其「見るあ見られあい」のハ「漢語を用ゐないで

すむのよ漢語をつかひ和語と入れないでそむのに和語を當嵌め甚だしいのハ眼前洋語などハ決してつかふへきでない處迄洋語を用ゐる」れか一原因との御説でした　仰れ通り必要の追りにも遇ゝぬに漢語や和語や洋語を使ふのハ從來の文よ伴なふ惡弊で　或ゝ言文一致にもそれか附隨してもゐましやう

然し言文一致ハ命題か表出してゐる如く普通れ語と普通れ文とを違はせぬが本來れ趣旨此趣旨を遂けるに付いての注意として又約束として禁じわる條件と打捨くゝ擇ハぬものゝ―云ゝや―言文一致外の徒　其文に「です」「でしやう」が使ッてわるから迚單に之でよ依ッく言文一致と限りは出來ますまい

且其一步進んだ處で杜撰よ言語を使用そる所以の辯說として御述べか更に斯うわりました　第一ハ「日本語の錯雜」―此錯雜ハ地方〳〵の轉訛と意味なさッゝやうが果して左樣で御座いますか　第二は「日本語として用ゐてよいかゝるいか分かり象ぬるのもある」　果して此二つが源因として的中しゐることか　的中しゐるとしく此處申述べます　轉訛の段は御言葉通り西京と東京とハ大しい差があり又地方へ行くに從ッて非常よ違ひます　之ハ言文一致れ上に少あくない關係と與へてゐるもの　どの道或る手段を假ッて矯正の勞を執らねばあらものです　しかし文章の上でい早勢の趣く處　基礎とする其言語を荒まし指定しゝハゐましやう　第二ゝ如何樣のもれですか　是亦妾等の得解せぬ一つ　「日本語ハ和漢洋打交せでなる」とハ承知してゐますが　其語れ全化れ度合よ些しれ注意もなく又一向固有れ意味を云ひ盡せぬのら用うるあどの必要よ依るのでもあくそして自ら言文一致だと旗幟を立てゝ澄まし込んでゐるものあらハよいとも思ッて用ゐましやう其他のものハ棄却するに何遷疑しましやうかどちらよしても分りませんで　其論結としての「これも止むと得あい止むと得ない計りてあく如何よ不束あ語でかいてもそれハい々んといふことが出來あい」の御言葉　妾等ハ妾等の持つてゐるコンモンセンスより守るべき普通の注意約束を少しも守らぬやうな即ち勢れ趣く處も語らむ止むと得るのに止むを得ぬとして無晴の語を用ゐるやうあ言文一致に接すれバ直ちに之ハいけんと思ひます又いけんといへるものたと信し居ります　御説を演繹すると或ハ「どの文体でらいたものでもいけんといふことの出來るものいない」といふやうあ結果よ立至りれしますまずか　とうよも得服せません

殊に其文章を一定そるの方策でそ　妾等も固より一日も早く其一定を希望するもれ　が御説でゝ「其言語を取調べて一つ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

の大字書を編むがいゝ」それに付ては「日本語の正しいものゝある丈古語や漢語洋語の使はんでも濟む丈を調へて其他の使ふへき必要あるもの之と日本語とする」とのことで御座いましたが此樣なことは人界の仕事として出來得ることでしやうか日本語さへ數少なくないことまして數多い漢語數多い洋語の使はんでも濟むのはまアどれ位なるでしやうか　そして其他の使ふべきものを日本語とする　するといふても斷じて出來得ぬこと　假に其樣なことが如何の方策よ依ッてか先づ出來得るとしても未曾有れ勞力に對する報償價値は無いでしやう　ない計りか却て文學の進路を杜絶しませまいか　妾等の考へでは自然陶汰の大則は用捨なく此言語にもはたらきを及ぼしてゐること、信じ居ります　で之は日本語之は外國語之は用うべきもの之は用ゐべからざるものなどの區劃を立て從ッて此書中よ有る外は一切用うることは出來ないとの神聖むしろ奇怪な勢力を持ッ　る字書と編むゝぞるのことは之を誰方にも望みは致しません　妾等れ考案—といふも既得の智識の少ない身何の見得らる、處のものかなりましやうが只妾等全志のものは命かけて此言文一致を守りたいこと是を望ゝ居りますれです　固より何とか議られもしましやう　が修練を積んでこそ其堂奧にも達し得らるゝもの共に此道のため先に御勉め下さいませ　美辭學とやらには「實詞は實詞を與ふへき資格なるものより來らねばあらぬ」ともなるとか反對の誹議もさうでしやう判決らしい關子に誹議したものか有ッた迚其人か其人でないやうな場合れ猶更のことです　何の擇ふ處が有りましやう　實に妾等は此言文一致れ筆を執るが言文一致を普通ならしめる手段の唯一共思ひ居るのです　言文一致の文が多ければ一方よ自然讀むものも多い理客觀的ふ此主義の他より卓優なれを發見もしましやうか　倫諸先輩には此日本の言語—仮言仮語よ存在する理法と考究發揮して其間亦一定動りそことの出來ないものゝ有る所以を明示せられたいのです　此曉離迚もですが言文一致に從かふてゐるものは特殊の關係なる丈其喜ひは比較して如何程でしやう　一段其語法を勢の趣く處の指定しゝ基礎語に當て嵌めゝ應用談話書を御編纂下されましたなれば地方〱の轉訛等にも對して誠よ恰好な矯正手段、此破竹の勢ふ依ッてはあゝ妾等の言文一致は成り上りましやうの—理想の現實　なゝ妾等全志の此時の嬉しさは　以上長々しう文字を重ねて來ました其間語勢の自然失體に渉ッゝ處もなくはなりまそまい惡しからぎ御容恕の上　殊に妾等の常、論理の其礎範圍と間違へてゐる点もありましやう　全志に愛でゝ御指摘一入明詳な御計畫を御聞のせ下さいませ　尚末筆ながら此紙尾を假ッて此道よ御堪能な山田先生よも御示敎を併せて御願ひ申上ます　以上の長文修辭も定めてとゝのひ居りますまい其ため或は家內から火を出すやうな嫌ひがあるとのことで御座いますれば無論沒書して下さるが妾等の本志　蛇足ながら一寸…

● 書學類纂　第三回の博覽會よ天女の油繪を出品した人即ち、本多錦吉郎氏が歐州美術の案內書として作られたのが此書物、此類の今日世に少いだけ一層此書の價値は增しました。美術に志す人は是非看るべき好書です。 發行所は神田雉子町の圖々社、一冊郵税共金十二錢五厘。

● こども　府下北豐島郡下駒込村の少年園からの發兌、大に体裁も記事も宜しく、こどもと題しく幼童に讀ませるよは極めく愉快と利益とを持ッたものです。

● 小學毛筆書帖　近藤明德氏編、全九冊、小學課程を極めてよく酙酌した近頃無類の好書でそ。 教授用の書帖は其筆の巧なのより其質實である事、今れ世になる同種類の書はよく此目的も達して居るのは極めて少ない、吾々は小學校のためこれ類れ善良な書物の出來たのを喜びます。書は光淋風、其彫刻の精巧よく筆意を失はぬのを敬服しました（發行所芝區烏森町藤村氏）

通信答問

竹下さま——(一)文章になる符号〇と完全した一文章時の終りにつけ、「、」は稍完全した二以上の文章の結びついた時に用ゐ、は西洋のコンマと同じく句の間に切るのです(二)文章を書くに自分が客となり主となるは場合により自由です(三)韻文の意味と國民之友第九十六号（十月三日發）に美妙齋氏が論じてなりました。

田舍むす女——(一)履物の痕を落すよは茯苓の法が硇砂れ法より早く利きます(二)「ケヾレ」と「心」といふ義です(三)其實充分に痰を去る法は無いのです。よし有ッても多くは毒でそ。咽喉を滑よするが先宜しい、それにはなまり鹽辛い物を食べぬのが第一の手段です。

白芙蓉——(一)和歌俳句よ關しては神田花田町から雅學新誌が出ます。俳句ひとりに關しては濱町から俳諧矯風雜誌、明倫雜誌などが出ます(二)小指れ爪を長く伸ばすのは實く危險です(三)化粧に關しての正確れ書が今日有るか否やは吾々に斷言出來ません、先無いと信じます。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

渡邊省亭　密畫

本月下旬　發賣

こども

世に子供なる人ハ、此の『こども』を求めて讀ませ給へ。『こども』にハ面白き繪あり、面白き話あり、讀み易くて分り易し。いやよ本嫌ひの子供も、此の『こども』を見ば、樂みて讀むべし。讀ませ給へ、又讀んで聞かせ給へ。子供の惡戯ハ直るべし。子供ハ本好になり、賢こくなり、物知になるべし。子供を可愛がる母樣、姉樣、皆此の『こども』を讀ませ給へ。定價一冊金三錢、十冊前金貳拾七錢、郵税一冊五厘とす。毎月廿五日の發行之。

第八號目次（十月廿五日發兌）

誰よなりたい。〇誰にありたくない。〇大ちやんの猫と鼈。(圖入)〇玉とポチ。(圖入)〇ワシントンの規則。〇成程判りたり。(圖入)〇頭の上を馬車。〇蕈狩り。(圖入)〇妙な勘定。〇其一、よれしらせ。〇獅子と黒奴。(圖入)〇其二、ア、夢でなッた。〇どちらも怠りもの。〇其三、雨天。〇考へ物。〇其四、後悔。〇前号の解答。〇筆の蕾(子供の作文)

發兌　東京府下北豐島郡上駒込村十九番地　少年園

遞信省認可

●例年の通り來る十一月一日より三日間冬衣賣初仕候間賑々敷御來車不限多少御用向の程偏ニ奉願上候

●よせきれ　●見切反物種々

●直輸入品新着廣告

豫而歐洲各國へ注文致置候男女洋服地新柄入荷仕且爲換相場之都合ニ依而頗ル廉價ニ出來仕候間此際一層勉強仕候

○新柄フランチル　各種
○上等毛織膝掛　各種
○流行柄毛織肩掛　各種
○廻しヱ及ビ鳶合羽　各種
○上等毛メリ安ニ及ビフランチル其他シヤツ類　各種
○絹ニ及ビリンチルハンカチーフ　各種

十月

日本橋通一丁目
白木屋　吳服店
　　　　洋服店

名刺
石版
印刷

昨年末弊社において名刺石版印刷と極めて廉價に御請合致したところ大に世の喝采を博し尚今年もと御催促の有るため折角の御厚情に從ふ事に決し廣く左記の廉價を以て御注文に應じます故續々御注文と願ひます最も弊社印刷の石版名刺はいづれも流行の新形です

紫式部

阿茶局

◎定價
●一度ぎり百枚金貳拾貳錢から上等六拾五錢まで。
●同五十枚金拾四錢から上等四拾五錢まで。
●二度ずり百枚金三拾六錢から上等壹圓拾錢まで。
但し百枚以上の分、及び二度ぎり百枚以下は印刷しません
○書と入れゝば書料一種につき十五錢を加へる事。
○右の價は紙質の良否によるのでも、印刷に至ッては何れも同じことでも。
○名刺は注文日から遲くも十日間にこしらへる事。
○注文の方も名刺差送郵稅金四錢を申込と同時に御送りなりたい事。
○普通郵便四錢分に對する書留料御送付の上は同じく書留にして差上ぐる事。
○名刺代は何れも前金で、決して加減をせぬ事。
○注文の方は寸法、價格、字体、字の大きさ、其他一切の事を詳細に申送られたい事。
○此名刺印刷も十二部以上のいちつめ豫約家に限一割引の事

明治二十三年十月

成美社